

教育哲学会 第61回大会 プログラム

山梨学院短期大学

2018年10月5日（金）～10月7日（日）

第61回教育哲学会大会準備委員会



大会日程

10月5日（金）

13:00 ~ 15:00	【特別企画】ラウンドテーブル1 子どもとの哲学対話	※事前申込が必要です。
15:30 ~ 17:30	全国理事会（サザンタワー6階・会議室）	

10月6日（土）

9:30	受付（サザンタワー3階・レインボーホール）
10:00 ~ 12:30	一般研究発表①
12:40 ~ 13:40	ランチタイムセッション（サザンタワー4階・401教室）
13:50 ~ 14:50	総会・奨励賞授賞式（サザンタワー3階・301教室）
15:00 ~ 18:00	研究討議（サザンタワー3階・301教室） 「資質・能力」を哲学する一汎用〇〇は未来を拓く?—
18:15 ~ 20:00	懇親会（学生ラウンジ）

10月7日（日）

9:30	受付（サザンタワー3階・レインボーホール）
10:00 ~ 12:05	一般研究発表②
12:20 ~ 13:20	全国編集委員会（サザンタワー6階・会議室）
13:30 ~ 16:15	課題研究（サザンタワー3階・301教室） 「教えること」を再考する—教育（哲学）の再構築を目指して—
16:30 ~ 18:30	ラウンドテーブル

※一般研究発表は、発表20分／質疑応答5分です。

万一発表を取りやめる場合、発表者は速やかに大会準備委員会にご連絡ください。

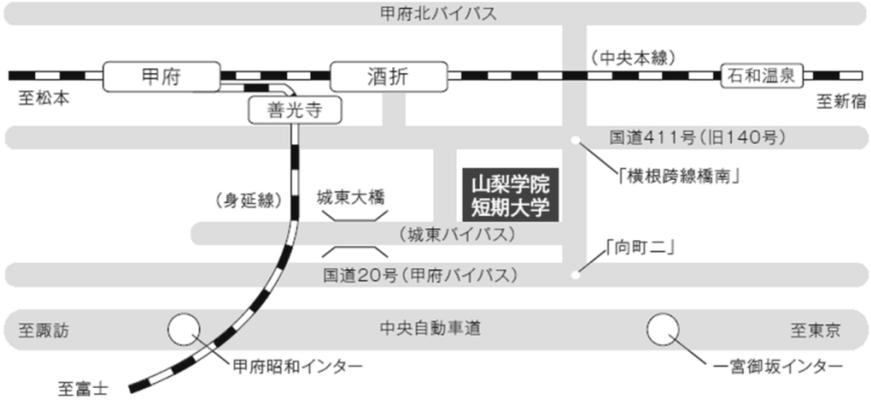
なお、欠席の場合、発表の繰り上げは行いません。

E-mail: pesj2018@ygu.ac.jp（教育哲学会第61回大会準備委員会事務局）

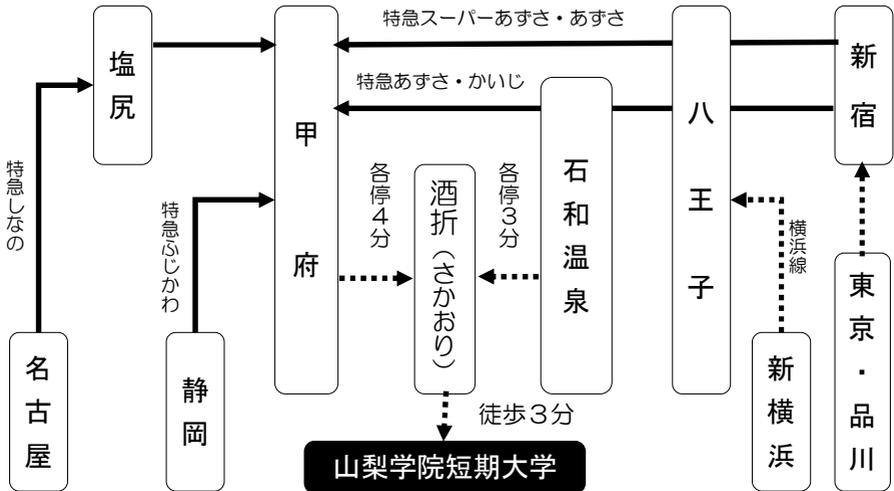
大会参加費

大会参加費	一般（会員・非会員）	3000円	学生（会員・非会員）	2000円
懇親会費	一般（会員・非会員）	5000円	学生（会員・非会員）	3000円

アクセスマップ



広域アクセスマップ



【電車の場合】

- JR中央本線「酒折」駅下車徒歩3分
- JR身延線「善光寺」駅下車徒歩12分

【高速バス】

- (東京方面から) 新宿駅南口高速バスターミナル「バスタ新宿」から石和經由「甲府駅」行バスに乗り、「山梨学院大学」下車。

会場案内



サザンタワー

受付【3階】
 研究討議
 課題研究
 一般研究発表
 ランチタイムセッション
 ラウンドテーブル

**45・51号館
 スイーツ館**

一般研究発表
 ラウンドテーブル

山梨学院小学校

ラウンドテーブル1
 ※事前申込が必要です

学生ラウンジ

懇親会

- 【サザンタワー】**
- ・受付（3階）
 - ・会員控室（3階）
 - ・研究討議・課題研究・総会（3階）
 - ・一般研究発表（4階）
 - ・ランチタイムセッション（4階）
 - ・ラウンドテーブル（4階・6階）
 - ・理事会・編集委員会（6階）

- 【45・51号館】**
- ・一般研究発表（2階）
 - ・ラウンドテーブル（2階）
- 【スイーツ館】**
- ・ラウンドテーブル（2階）

- 【学生ラウンジ】**
- ・懇親会

- 【山梨学院小学校】**
- ・ラウンドテーブル1（事前申込制）

2018年10月5日（金） 13:00~15:00

ラウンドテーブル

ROUND TABLE 1

山梨学院小学校

子どもとの哲学対話 Philosophy for / with Children

企画者： 田中 智志（東京大学）

山内 紀幸（山梨学院短期大学）

提案者： 山内 紀幸

鈴木 崇（山梨学院小学校）

山梨学院小学校 6年生

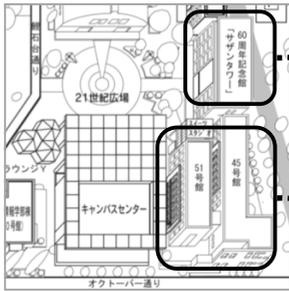
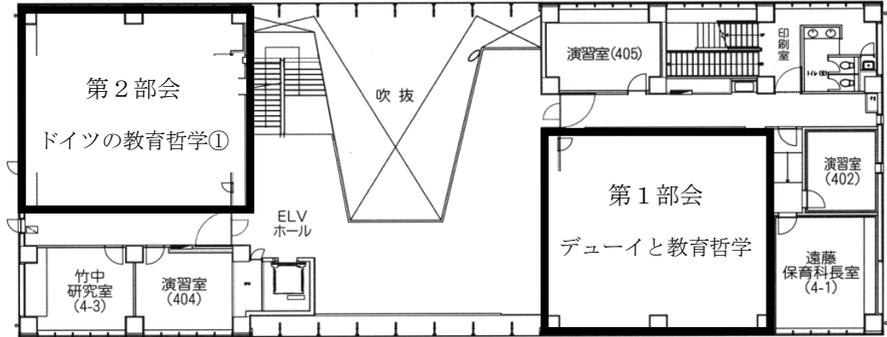
子どもの哲学（Philosophy for / with Children）と呼ばれる対話型の哲学の授業が、世界各地の小・中・高校で行われている。日本の小学校中学校での哲学授業の試みも散見されるが、まだまだ理論的・実践的に深められている状況ではない。山梨学院小学校では「哲学プロジェクト」として、6年生が年数回の授業を実施してきている。「なぜ生きるのか」「なぜお金は大切なのか」「恋って何だろう」等々、子どもたちなりのさまざまな疑問が浮かんできた。ギリシアの哲学者たちがそれらをどのように考えてきたのか、調べた子どもいた。友達との対話を通じて問題を整理する子どももいた。当日は、山梨学院小学校の「哲学プロジェクト」の一つとして、子どもたち中に教育哲学者が加わった学会員参加の対話型ワークショップを行っていききたい。これにより、日本の学校現場における哲学授業の在り方を検討していくための一助としていききたい。

※本ラウンドテーブルは**事前申込制**となっています。

参加をご希望の方は、**9月30日（日）まで**に大会準備委員会事務局（pesj2018@ygu.ac.jp）までメールでお申し込みください。

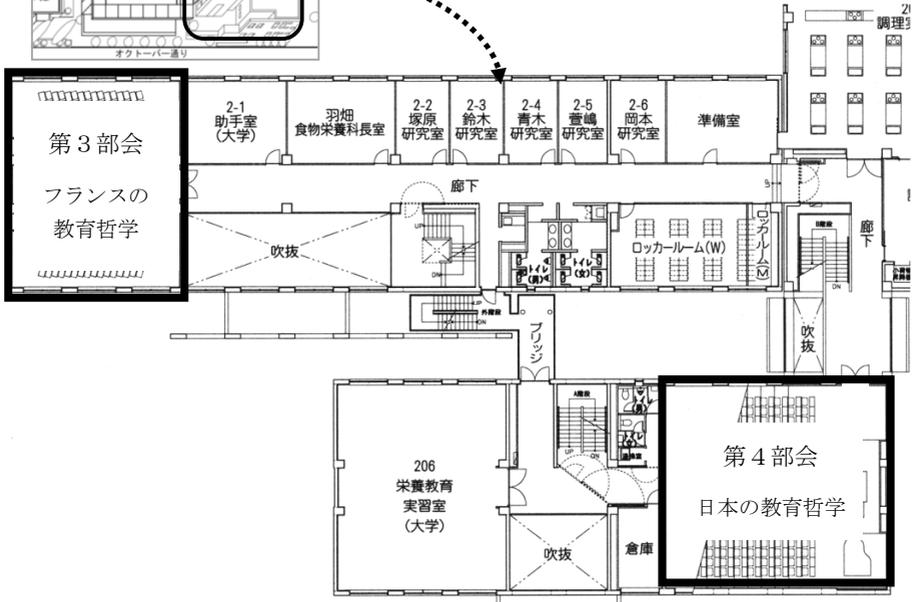
一般研究発表①・会場案内図

一般研究発表① 10月6日（土）10：00～12：30



サザンタワー 4階

45・51号館 2階



一般研究発表①

第1部会

サザンタワー4階401教室

デューイと教育哲学

司会：上野 正道（上智大学）・生澤 繁樹（名古屋大学）

- 10:00 デューイにおけるきくことの諸様相の再定位
ーアイディ『聴くことと声』を手がかりにー
神林 哲平（早稲田大学系属早稲田実業学校初等部／早稲田大学・院生）
- 10:25 J. デューイの思想における教育への意志と教育者の哲学
松橋 俊輔（東京大学・院生）
- 10:50 ブラック・マウンテン・カレッジのデューイ
西本 健吾（東京大学・院生）
- 11:15 D. ショーンの知識論がもつ専門職教育論としての意義と課題
岡村 美由規（広島大学・院生）
- 11:40 全体討議（～12:05）

第2部会

サザンタワー4階403教室

ドイツの教育哲学①

司会：櫻井 佳樹（香川大学）・広瀬 悠三（京都大学）

10：00 カントの『教育学』における「吐き気Ekel」概念の位置づけ

塚野 慧星（九州大学・院生）

10：25 フリードリヒ・シラーにおける歴史記述と人間形成構想

鈴木 優（慶應義塾大学・院生）

10：50 Th・W・アドルノの「自律」概念の検討

安道 健太郎（日本大学・院生）

11：15 主観から媒質へ

—ベンヤミンの初期ロマン主義論と近代の批評＝批判—

浅井 健介（京都大学・院生）

11：40 カンペ編『点検書』における「汎愛派」教育思想に関する考察

塩津 英樹（島根大学）

12：05 全体討議（～12：30）

フランスの教育哲学

司会：池田 華子（天理大学）・有源探 ジェラード（玉川大学）

- 10：00 後期フーコーの自己の訓練論におけるプラトン思想について
堤 優貴（日本大学・院生）
- 10：25 現代中国における「新自由主義」の
歴史的・社会的諸条件に関する考察
ーフーコーの統治性理論を手がかりにー
張 林倩（名古屋大学・院生）
- 10：50 テクスト的世界としてのカリキュラム
ーリクールの存在論的解釈学を手がかりにー
朝岡 翔（大阪体育大学等・非常勤）
- 11：15 G. ドゥルーズの思想における「愚かさ」の意味
松枝 拓生（京都大学・院生）
- 11：40 全体討議（～12：05）

第4部会

51号館2階205教室

日本の教育哲学

司会：金光 靖樹（大阪教育大学）・林 泰成（上越教育大学）

- 10：00 戦後日本のアカデミズムにおける道徳教育の思想史
鈴木 篤（大分大学）
- 10：25 保育における「環境」
—倉橋惣三の場合—
安部 高太郎（東京大学・院生）
- 10：50 探究のコミュニティ対話における「知識による救い」の可能性
—「問題行動」の多い子どもの現象学的事例研究—
田端 健人（宮城教育大学）
- 11：15 全体討議（～11：40）

ランチタイムセッション

教育哲学の境界を問う

—教育哲学は何を射程に含めうるか—

企画：教育哲学会次世代育成企画委員会

小野 文生（同志社大学）

生澤 繁樹（名古屋大学）

下司 晶（日本大学）

井谷 信彦（武庫川女子大学）

司会： 小野 文生

報告： 大塚 類（青山学院大学）

下司 晶

杉田 浩崇（愛媛大学）

奥井 遼（同志社大学）

ファシリテーター： 小野 文生

下司 晶

生澤 繁樹

井谷 信彦

平田 仁胤（岡山大学）

「次世代育成企画委員会」による企画です。比較的研究歴の浅い会員の積極的な参加を期待します。

2回目となる本年は、教育哲学と他領域の「境界」を考えることを通して、教育哲学とは何か、教育哲学はどこまでその射程を持ちうるのかを考えたいと思います。

教育哲学と一口にいてもさまざまな流儀やスタイルがあります。哲学でも分析

哲学とドイツ観念論では全く流儀が異なりますし、複数の領域において研究を継続している会員も少なくないと思います。教職課程科目を担当する会員は、近年では特に、学校教育における実践性を強く求められることも多くなっていることでしょう。

教育哲学が境界面として接する分野は例えば、オーソドックスなディシプリンとして、教育史・教育思想史がまず考えられますし、フィールドワーク、ナラティブ研究、実証研究、社会調査などの経験的研究や、教育方法学、教科教育、道徳教育、生徒指導、授業研究、臨床教育学などの、いわゆる実践研究もあげられるでしょう。さらに現代的な課題として、グローバル化、貧困、移民難民、環境問題、戦争、生命技術、精神医療、食糧問題、無縁社会、法と政治などの社会問題や、生命倫理、教育倫理、宗教といった倫理的な課題も射程に含まれるかもしれません。ジェンダー・スタディーズやカルチュラル・スタディーズ、ポスト・コロニアル・スタディーズなどの潮流とも無関係ではられません。

では、ますます流動化していく社会において、また多様化していく研究の在り方に対して、教育哲学はどこまでの射程を持ちうるのでしょうか、

本企画では、教育哲学ならではの問題関心の広さを活かしながら、教育哲学の持ちうる射程を考えてみたいと思います。そのため、フィールドワークなどの経験的研究と、文献による研究の両方を視野に入れて研究を進めている会員に話題提供をして頂きます。

その後、少人数のグループ・ディスカッションを持ち、参加者相互の交流の場としたいと考えています。フランクな雰囲気、教育哲学にとって本質的なテーマを一緒に考えていきましょう。

本企画はランチタイムセッションとして行われます。昼食をとりながらお気軽にご参加下さい。会場での昼食の販売はございませんので、事前にご準備下さい。

研究討議

「資質・能力」を哲学する

一汎用的〇〇は未来を拓く？一

司会： 山内 紀幸（山梨学院短期大学）

松浦 良充（慶應義塾大学）

報告： 奈須 正裕（上智大学）

松下 良平（武庫川女子大学）

青柳 宏幸（山梨学院短期大学）

2017年3月、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領の改訂が告示され、更に2018年3月には高等学校学習指導要領の改訂が告示された。2030年を見通して作成されたというこれら新しい学習指導要領のキーワードのひとつが「資質・能力」である。

今回の学習指導要領の改訂は中央教育審議会における年間にわたる議論の成果である答申を受けてなされた。中教審での審議は「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の作り手となるために必要な資質・能力を育む『社会に開かれた教育課程』の理念のもと、従来とは異なる新しい枠組みで進められていったとされる。すなわち、従来の学習指導要領がともすれば「何を教えるか」という教育内容の議論に終始する傾向があったことを反省し、「まずは学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から観点から、育成すべき資質・能力を整理する必要がある。その上で、整理された資質・能力を育成するために『何を学ぶのか』という、必要な指導内容等を検討し、その内容を『どのように学ぶのか』という子供たちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある」といった具合に、育成すべき資質・能力を始点・基準として改訂作業が進められたのである。

育成すべき資質・能力は、「①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く

『知識・技能』の習得)」、「②理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」、「③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」という「資質・能力の三つの柱」に整理されて示されている。ここから分かるように「資質・能力」は、単に知識として知っているだけでなく現実の社会生活の場面で汎用的に「生きて働く」ことすなわち使えることを重視し、また認知的能力だけでなく情意や対人関係などを広く含む非認知的能力を含んでいる。これらの点において、学習指導要領における「資質・能力」は、「生きる力」、「PISAリテラシー」、「キー・コンピテンシー」、「21世紀スキル」などといった、近年いくつも提唱されてきた新しい能力とその特徴を共有しており、それらの集大成であると位置づけられる。これら新しい能力の最大の特徴のひとつは、予測困難な未来を拓くために能力の汎用性を強調する点にある。

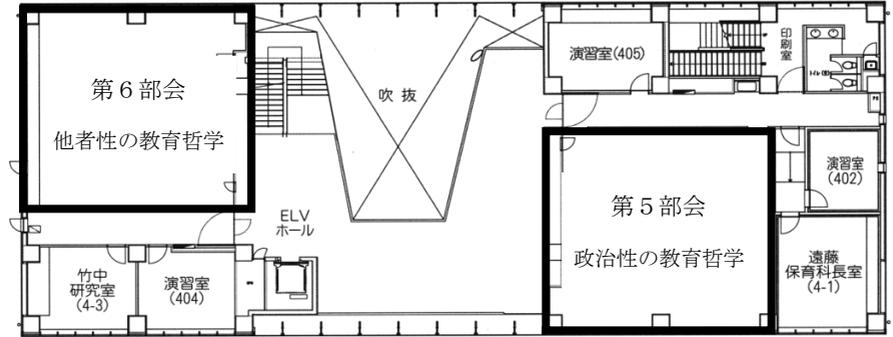
これらの新しい能力とそれを基盤としたカリキュラムはまた、心理学、認知科学、学習科学、脳科学などの成果を大幅に取り入れ、その実証性に支えられているという点も大きな特徴である。たとえば、今回の学習指導要領改訂において、「何ができるようになるのか」から「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」とつなげていくのは、メタ学習や有意味学習、オーセンティックな学習などの学習理論であり、それらは「主体的・対話的で深い学び」という概念に要約された。「資質・能力」はまた、「主体的・対話的で深い学び」という学習・学びの原理の転換をも含んでいるのである。

このように見てくるならば、今回の学習指導要領の改訂とりわけ「資質・能力」は、教育目標や学習原理といった原理的な水準の論点が含まれている。そして、これらの論点は、一見すると実証的・科学的な研究の蓄積に支えられ緻密に構造化されているようにも見える。けれども、そもそも求められている「資質・能力」が予測困難な未来を切り拓くべきものであるとされている以上、それを実証し尽くすことは本来できないはずである。今回の学習指導要領の改訂が問いかけている、未来を生きる子供たちに必要となる「資質・能力」は何か、学びとは何か、といった問題は教育哲学が伝統的に問うてきた問題にほかならない。そうであるとすれば、ここにこそ教育哲学の出番があるのではないだろうか。

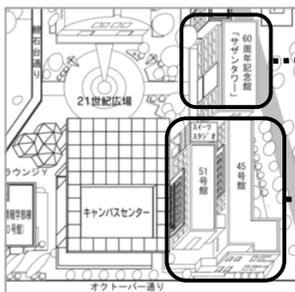
本研究討議では、高度に発展したがゆえに未来が予測困難な時代における教育と教育哲学の役割を、新学習指導要領の「資質・能力」を中心にしつつ、それに議論を限定することなく広く現代の能力観・能力研究を射程に捉えて、議論をしていきたいと考えている。

一般研究発表②・会場案内図

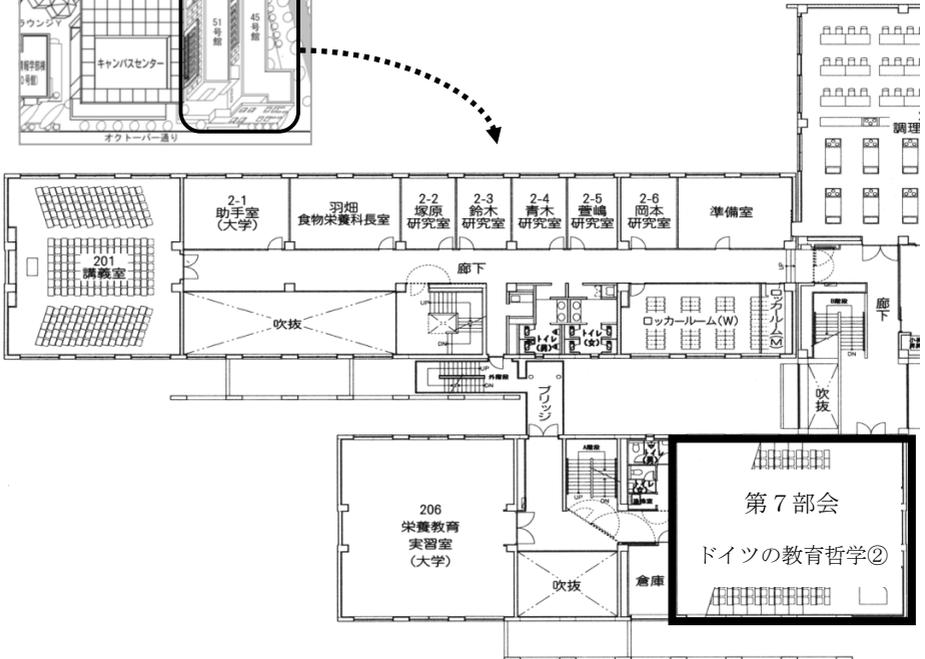
一般研究発表② 10月7日（日）10：00～12：05



サザンタワー4階



45・51号館2階



政治性の教育哲学

司会：奥野 佐矢子（神戸女学院大学）・平井 悠介（筑波大学）

- 10:00 ハンナ・アレントにおける「始まり」の教育学的可能性
樋口 大夢（東京大学・院生）
- 10:25 ハンナ・アレントにおける「社会的なもの」の政治的可能性
石神 真悠子（東京大学・院生）
- 10:50 C. ムフによる左翼ポピュリズム解釈とその市民育成論としての帰結
植田 翔（広島大学・院生）
- 11:15 「〈実践〉としての教育学」における共約不可能性の学問論的意義
—R. J. バーンスタインの〈実践〉論におけるR. ローティ批判を手掛かりに—
深見 奨平（広島大学・院生）
- 11:40 全体討議（～12:05）

他者性の教育哲学

司会：平田 仁胤（岡山大学）・森岡 次郎（大阪府立大学）

- 10：00 ヒューム『人間本性論』における「共感」
—人間形成論における「共感」概念の可能性—
武田 萌（京都大学・院生）
- 10：25 「他者の心を知ること」の認識論を超えて
—S・カベルの「acknowledgement」概念を手がかりに—
曾我部 和馬（京都大学・院生）
- 10：50 西田哲学における他者の問題
—論文「私と汝」を中心に—
高谷 掌子（京都大学・院生）
- 11：15 鈴木大拙の自己形成観における知と情
岩瀬 真寿美（同朋大学）
- 11：40 全体討議（～12：05）

第7部会

51号館2階205教室

ドイツの教育哲学②

司会：野平 慎二（愛知教育大学）・井谷 信彦（武庫川女子大学）

10：00 ハイデガーのニーチェ解釈における人間化と脱人間化

川上 英明（東京大学・院生）

10：25 「ガダマー／ハーバーマス論争」の教育学的「改釈」

森 祐亮（慶應義塾大学・院生）

10：50 アーペルの「共同責任」と「教育という倫理」

丸橋 静香（島根大学）

11：15 過去を経験するとはどういうことか

—フランク・アンカースミットにおける歴史家のBildungに着目して—

李 舜志（東京大学・院生）

12：40 全体討議（～12：05）

課題研究

「教えること」を再考する

— 教育（哲学）の再構築を目指して —

司会： 加藤 守通（上智大学）

上野 正道（上智大学）

報告： Biesta, Gert (Brunel University)

小玉 重夫（東京大学）

小野 文生（同志社大学）

教育に関する言説は、新教育以来、そして近年においてとりわけ、「学ぶこと」を中心に展開されてきた。我が国においても、中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第一次答申（1996年）が示すように、教育の中核には、「学ぶこと」がおかれ、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動する」ことが、未来の子供において期待されている。この答申が示すように、「学ぶこと」は、「主体性」「自己実現」「生きる力」などととともに現代の教育理念の主要な星座群を形成していると言える。それに対して、「教えること」は背景に退き、あくまでも「学ぶこと」を補佐する（「自分探しの旅を扶ける」）ものとして存在を認められている感がある。現在我が国で注目されているアクティブ・ラーニングもこの潮流の中に位置付けられるであろう。

とはいえ、この潮流には、弊害もある。それは、ネオリベラルな思潮と容易に結びつき、教育を学ぶ者の主観に委ね、その結果を個人の責任に還元しかねない。また、学ぶ者の選択を重視する考えは、教育を、顧客のニーズにあった商品を提供するサービス産業に貶めかねない。

このような状況の中、教育哲学の課題は、流行におもねり、それに適したイデオロギーを提供するのではなく、（ソクラテスが2500年前にしたように）それを批判的に

吟味することにあるのではなからうか。それは、「学ぶこと」「主体性」「自己実現」「生きる力」といった星座群を解体し、(必要ならば)再構築することも意味する。

この試みにおいて重要な役割を持ちうるのが、「教えること」の再検討であろう。もちろん、このことは、教育に権威主義や強制を再導入することではない。このような古い考えにとらわれる限り、我々は決して、「学ぶこと」と「教えること」の悪循環から逃れることはできない。求められているのは、「教えること」をこの種の二項対立の閉鎖的空間から解放し、それをより広い地平の中で捉えることでなからうか。

本研究討議では、*The Rediscovery of Teaching* (Routledge, 2017)の著者であるGert Biesta教授を海外からのゲストとして迎え、我が国の教育哲学者たちと、いまなぜ「教えること」なのか、について議論を深めたい。

INTERNATIONAL SYMPOSIUM***Rethinking Teaching*****Toward the Reconstruction of (Philosophy of) Education**

Moderators: Morimichi Kato (Sophia University)

Masamichi Ueno (Sophia University)

Presenters: Gert Biesta (Brunel University)

Shigeo Kodama (The University of Tokyo)

Fumio Ono (Doshisha University)

Broadly speaking, it seems that the discourse of education has been centered on learning since the rise of New Education. This trend still continues worldwide, Japan being not an exception. As typically shown by the report of the Central Council of Education with the title, “Nature of Japan’s Education Prospects of the 20 Century” (1996), learning occupies the central place in the contemporary educational discourse in Japan and “learning, thinking, judging, and acting of one’s own initiative” is expected from the future children, learning, surrounded by other related concepts such as autonomy, self-realization, and the power to live (*ikiru chikara*), constitutes the major constellation of the contemporary educational ideas in Japan. Teaching, on the contrary, retreats into the background as something that supports learning that is characterized as “a journey in search of the self”. The active learning, which is much talked about now, can also be placed in this trend.

However, this trend is not flawless. For example, it can easily be connected with the neoliberal thinking, running the risk of degrading education to a service industry that provides the customers with the merchandises.

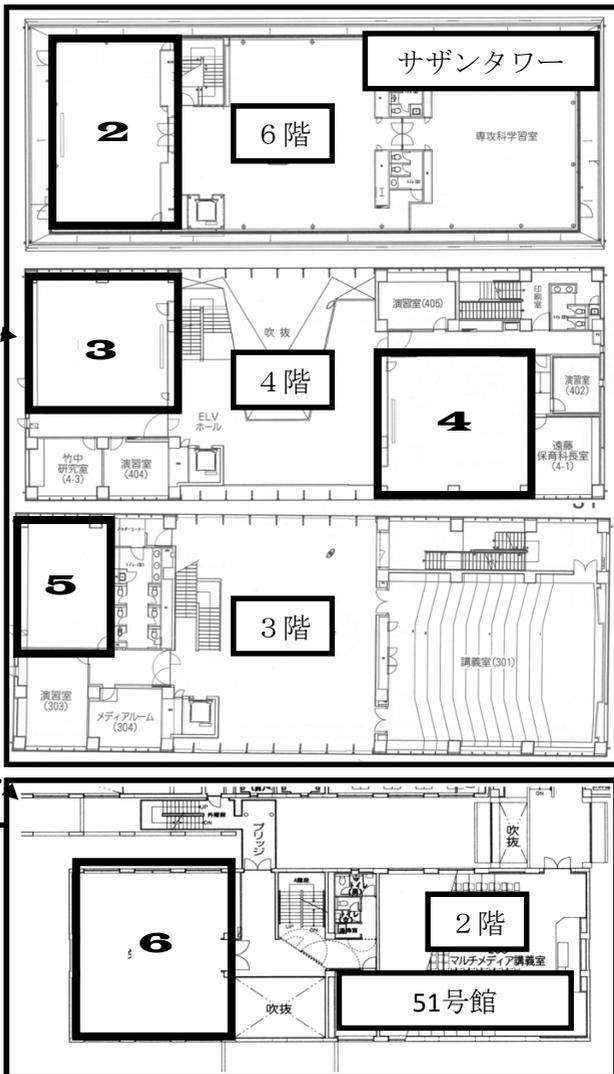
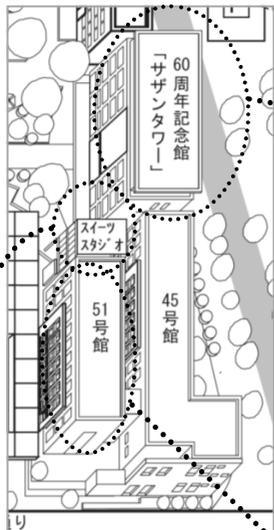
In this situation, it is the task of the philosophy of education to examine the trend critically (as did Socrates 2500 years ago) instead of providing fashionable ideology to it. This might mean the deconstruction and (if

necessary) the reconstruction of the constellation of learning, autonomy, self-realization, and the power to live in the educational discourse.

The reexamination of teaching can play an important role here. This does not mean that we should reintroduce authoritarianism and compulsion into education. As long as we are bound with such old ideas, we can never get out of the vicious circle of learning and teaching. What is sought after is to liberate teaching (and learning) from this closed sphere of dichotomy.

In this symposium, by inviting Professor Gert Biesta, the author of *The Rediscovery of Teaching* as a guest speaker, we would like to deepen our discussion about this problem.

ラウンドテーブル 会場案内図



- 2 ディシプリンとしての教育学を考える
- 3 「共生」と「継承」の間、
あるいは「継承」と「共生」の間
- 4 言葉とアートをつなぐ教育思想
- 5 保育が新しい教育哲学をつくる?!
- 6 AI技術文明時代に求められる教養を探る
- 7 Reconsidering the Intersection of Politics and edcation

ディシプリンとしての教育学を考える

企画者・報告者： 小笠原 道雄（広島大学名誉教授）

森田 尚人

司会： 丸山 恭司（広島大学）

指定討論者： 白銀 夏樹（関西学院大学）

北詰 裕子（青山学院大学）

教育研究の細分化が進むとともに、学際的な研究活動も盛んになっている。他方で、教職課程の側から教育学に求めるものも著しく変化している。こうした状況のなかで、教育学がひとつのディシプリン（学問領域）として存続してきたとすれば、それはどのような事情によるのだろうか。

提案者は、ドイツ語圏、ないし英語圏の教育学研究を主な専攻領域としてきたが、本学会のプロジェクトとして、戦前期から戦後初期にいたるわが国の教育学の歴史を研究する機会を与えられた。そうした体験を通して、ひとつのディシプリンとして教育学のあり方を主題的に論ずることがあまりに少なかったことに気づかされた。小笠原と森田が、それまでの研究歴を振り返りながら、教育学のあり方について問題提起を行う。若い世代の研究者（白銀夏樹・北詰裕子）の応答をきっかけに、参加者の間で自由な議論がなされる場になればと考えている。

ROUND TABLE 3

サザンタワー 4階403教室

「共生」と「継承」の間、
あるいは「継承」と「共生」の間

企画者・提案者： 高橋 舞（立教女学院短期大学）

提案者： 高橋 舞

金 正美

花崎 皋平

指定討論者： 岡部 美香（大阪大学）

20年ほど前に「共生」というテーマを企画者に与えてくれた、韓国「ナムの家」の元「従軍慰安婦」のハルモニ（おばあちゃん）たちのほとんどが、銅像に変わってしまった。直接出会った者として「継承」の在り方を問うという、現在の企画者のテーマが必然的に生じることになった。「共生」はいかに「継承」となりえるのかの問題である。

他方戦争、差別、震災、厄災など、今、共生社会の実現に向かって継承していかねばならない記憶の多くは当事者不在時代をむかえ、継承すべき他者（の記憶）に直接出会うことなく、「継承」という〈生の技法〉を、共生知として体得していかねばならない課題に直面している。「継承」はいかに「共生（知）」となりえるのかの問題である。

隔離・差別に苦しみながら重度ハンセン病患者として生を全うされた桜井哲夫氏と共に生き継承者になられた金正美氏、「共生」と「継承」を原理的に追究し続け実践されてきた哲学者・花崎皋平氏両氏の歩みから、「共生」と「継承」を繋ぐ手がかりを得たい。

言葉とアートをつなぐ教育思想 —「詩的な言葉」「想像力」「記憶」を手がかりに—

企画者・提案者： 渡辺 哲男（立教大学）

山名 淳（東京大学）

柴山 英樹（日本大学）

本企画の参加者は、これまで、学習指導要領のキー概念となっている「言語活動」を主題とした、科研費を得ての共同研究を6年にわたって続けてきた。本企画は、この6年のひとまずの総括である。アクティブラーニングや「主体的・対話的で深い学び」といったコトバが広がりを見せるなかで、学習者が自ら考え、発表するという「かたち」だけを増やそうという悪しき「対話信仰」も増えている。そうした状況を克服するには、「深い学び」をもたらす対話の「質」を問わなければならない。すなわち、実際表現された言葉から（うまく表現できずに）漏れたものを、また言葉にしようと拾い上げていこうとする、言葉と言葉のあいだにあるものへの着眼が必要なのではないか。この問題を、「詩的な言葉」「想像力」「記憶」などといったキーワードを手がかりに考察する。

保育が新しい教育哲学をつくる？！

企画者： 田口 賢太郎（山梨学院短期大学）

富田 純喜（高崎健康福祉大学）

司会： 河野 桃子（信州大学）

提案者： 田口 賢太郎

富田 純喜

米津 美香（奈良女子大学）

保育と教育は何が違うのだろうか。保育は、その概念のうちに「教育」を含意しているはずであるが、教育哲学者であっても「保育」の実質に即してその違いを説明することは難しいかもしれない。というのも、これまでの教育哲学を顧みたとき、控えめに言っても保育が正面から注目を浴びることは少なく、保育は教育哲学にとって周縁的な位置取りであったように思われるためだ。

本ラウンドテーブルでは、保育と教育哲学の二軸を柱に、3人の提案者がそれぞれ今まで取り組んできた研究の文脈を踏まえつつ、報告する。第一には、保育の事象を質的研究によって解き明かそうとする立場から。第二に、予め幼児の教育を対象としている思想家の思索に拠って。第三に、教育哲学・思想を援用して保育を読み解こうとする視点から。それぞれに保育という舞台装置使って、異なる角度から光を投げかけ、新たな教育哲学像の描出を試みたい。

AI技術文明時代に求められる教養を探る

企画者・司会： 鈴木 晶子（京都大学）

提案者： 鈴木 晶子

松浦 良充（慶應義塾大学）

福田 雅樹（大阪大学）

人工知能など新しい技術の急速な進展により、社会は大規模な変動の渦のなかにある。AIが相互に繋がる社会において、仕事の仕方はもとより生活の細部にまで技術が入り込むことで、人間の知情意、身体も大きく変容しようとしている。新たなAI技術文明創造の担い手であるとともに、その技術の利活用を通して、自然や環境との共存・共生していくために必要な、人間の能力・技能とは何だろうか。また、技術革新に伴う産業構造の急激な変化に対応するために十分な教育のあり方が、制度、組織、内容、方法の全般において問われている。本ラウンドテーブルでは、教育哲学においてこれまでしばしば論じられてきた教養をめぐる論議を踏まえつつ、AIネットワーク化の進む社会を生きる人間に求められる教養そして教養教育を取り上げる。教養をめぐる問題系を、AI技術文明の時代の人間性や人文学の今後の展望を見据えつつ討議できたらと企図している。

ROUND TABLE 7

Sweets Studio 201

Reconsidering the Intersection of Politics and Education
— *East Asian Perspectives* —

企画者 : Shigeki Izawa (Nagoya University)

Masaki Takamiya (Osaka University of Health and Sport Sciences)

提案者 : Shigeki Izawa

Msaki Takamiya

Hektor K. T. Yan (City University of Hong Kong)

Cheuk-Hang Leung (The Chinese University of Hong Kong)

Ren-Jie Vincent Lin (National Taiwan University of Sport)

In this roundtable, we would like to understand the influences of politics in education and reconsider the politics of education, inviting the young educational philosophers from East Asia. Modern society has fabricated the useful fictions regarding the political neutrality of education. However, education was never neutral politically because it could not be escapable from the political influence all the time. Rather the history of countries around the world shows that education has been used directly or indirectly as a tool to support or maintain an existing political regime. But today, the problem areas of politics and education approach each other in various places and are crossing again. While social and political philosophy talks about the aims of education in relation to the claim for participatory politics or under the discourse over global capitalism, educational philosophy examines the new mode of politics with emphasis on moral education or political education. Based on the contexts of educational philosophy in Hong Kong, Taiwan, and Japan, this session will attempt critically reviewing the intersection of such politics and education and try raising new challenges to rethink about the relation of politics and education.

教育と政治の交わりについて再考する

—東アジアの若手教育哲学者とともに考える—

企画者・提案者： 生澤 繁樹（名古屋大学）

高宮 正貴（大阪体育大学）

提案者： 生澤 繁樹

高宮 正貴

甄 景德（香港城市大学）

梁 卓恒（香港中文大学）

林 仁傑（国立台湾体育運動大学）

本企画では、東アジアの若手教育哲学者を迎えて、教育における政治の作用を読み解き、教育をめぐる政治の力学を再考することの意味についてさまざまな角度から考えてみたい。近代社会は、とりわけ教育において政治的に中立であるという虚構を製造し装ってきた。だが教育はつねに政治の影響から逃れられず、決して中立なものとはいえなかった。むしろ各国の歴史が示してきたことは、教育がときには学校教育や社会教育といったかたちをとりながら既存の政治体制を強化し、それを持続させるためのツールとして積極的にあるいは気づかないかたちで利用・活用されてきたということである。だが今日、政治と教育の問題領域がさまざまなところで接近しあい、ふたたび交差しつつある。そこでは政治参加やグローバル資本をめぐる言説のなかで政治が教育のあり方を語りだし、道徳教育や政治教育の強調というかたちで教育が政治のあり方を問いなおす。本ラウンドテーブルでは、とりわけ香港、台湾、日本の教育哲学の成果と課題を踏まえて、このような政治と教育の交わりを批判的に再考し、政治と教育を考えるための新たな問題提起を試みてみたい。



教育哲学会第61回大会準備委員会

【委員長】

山内 紀幸（山梨学院短期大学）

【事務局長】

青柳 宏幸（山梨学院短期大学）

【委員】

河野 桃子（信州大学） 田口 賢太郎（山梨学院短期大学）

事務局： 〒400-8575

山梨県甲府市酒折2-4-5

山梨学院短期大学保育科・青柳宏幸研究室気付

E-mail: pesj2018@ygu.ac.jp



PESJ 61th Annual Meeting